届け 世界の果てまでも

令和２年　７月１７日
Ｎｏ．２１
文責　校長　飯久保一男

授業研究会

校内研究会の計画の一つとして，７月１４日（火）３校時に４年３組（的場学級）の算数の授業を本校の教職員で参観し，その授業についての研究会を行いました。日本の学校には，「校内研究」という他の国にはない，すばらしい文化があります。教職員が力量をつけていくためには，組織での研究・研修が必要です。そのための組織が「校内研究」です。※授業の様子は**ホームページ**（学校のひろば→日々のようす）にも掲載してあります。

…私が以前勤務していた押原小では，国際算数・数学授業研究会の方々（アメリカ・イギリスの学校の先生）がたくさん訪れて，授業を参観し，研究会を参観するという事業を受け入れていました。同時通訳をする先生もいて，英語で研究会の様子が説明されていました。研究会に参加するのではなく，押原小教職員のやっている「研究会を見て学ぶ」ため，日本にはるばるやってきたのです。日本の教育を学び，日本の「校内研究」という文化を学ぶためにきたのです。日本の「校内研究」は世界でも高く評価されています。

押原小を訪れた外国の先生方

ネイティブな甲州弁で
その先生方を案内する飯久保

ネットで「国際算数…」と検索したところ，私の画像が出てきてびっくり…。

本校のめざす授業は，学習指導要領が示す授業のあり方の中心である「主体的・対話的で深い学び」であり，本校の校内研究の研究主題である「一人一人を大切にする学習活動」です。文字や理論だけでは具体的な授業のイメージをつくることは簡単ではありません。実際の授業を全員で見て，その授業から教職員も（優れていることはもちろん，課題とされることからも）学び合うことで，共通の授業のイメージをもつことができます。そのイメージに向かって各自が取り組むことが，全教職員が同じ方向を向いて取り組むことになるのです。

今回の４年３組の授業は，算数の「角の大きさ」の授業でした。１８０度を超える大きさの角をどう測るかという問題を考えました。まず，一人一人で考え，次に，ペアでその考えを出し合ってお互いの考えを確認し，全体に発表していくというスタイルの授業でした。

４年３組　算数「角の大きさ」の授業

教職員による授業研究会

私は，これまで相当な数の授業を見てきました。中には，不謹慎にも，早く終わらないかなぁなどと思ってしまう授業もありました。しかし，今回の授業は，時間の経つのが早く「もう終わりの時間か」と思う授業でした。見ている私たちが楽しい授業は，やっている子どもや教師にとっては，もっと楽しい授業のはずです。今回の４年３組の授業は，本校の教職員にいい刺激になり，本校の今年の授業研究の方向をイメージさせてくれるものになりました。

ひとりぼっちに　たじろがず

東京教育大学（現在の筑波大）教授，立教大学教授を経て，都留文科大学学長を務めた教育者，上田薫先生の言葉です。上田先生の理論を実践している静岡県の安東小学校の子どもたちに上田先生が贈った言葉です。

（前略…）
道はたとい遠く険なるも
英志　りんとして　つねに　君らしくあれ
ひとりぼっちに　たじろがず

自分だけ周りと違って，一人になってしまうことは，子どもによっては，恐ろしいこと，恥ずかしいこと，みっともないことと思うかもしれません。大人でもそんな気分になることもあります。しかし，それで「自分らしさ」をなくすなら，一人ぼっちになっても堂々と「自分らしく」いなさいという意味に受けとっています。

本校の学校教育目標は，「自分を大切にし，他者を大切にする」子どもの育成です。校内研究に取り組むことは，学校教育目標の実現のための大きな一歩となります。研究の目標として，「子どもたちが自分の考えを表現し，出し合い，学び合う授業」をすることで，「ともに高め合う子どもの育成」と，「一人一人の確かな学力の定着」をめざしていくことを確認しています。

考えを出し合う授業の中では，自分の考えと周りの考えが違うことが多くあります。そして，自分が一人だけ違う考えのときもあります。しかし，その自分の考えが「根拠をもって」「こだわっている」ものであれば，たった一人でもたじろがずに，自分の考えを発表し，周りに訴えかけていけると思うのです。そして，その姿勢は，授業を深め，広げていく推進力になります。また，その力が「本物の学力」ともいえるのです。

日本には昔から，周りと違うことをよしとしない風潮があります。日本人はいろいろなことを「そろえる」ことが好きな国民性があります。　…もちろん，集団で生活する中には，そろえなければならないことはたくさんありますし，それが逆に日本のいいところである場合も多くありますが…。

しかし，一人一人違う人間なのですから，特に授業においては，周りと違うことを恐れる必要はありません。「一人一人が違うからいい」のです。

本校の教職員は，クラスや学年の団結を高めることや，学年や学校のまとまりをつくることに取り組んでいます。しかし，教育の目的はそれで終わりではありません。団結を高めたクラスをつくり，まとまりのある学年をつくる中で，一人一人が育っていくことが大きな目標です。一人を認め，一人を大切にし，一人の考えに耳を傾ける集団になると，その集団の中の一人一人がまたさらに成長していきます。それがまた集団を高めることにもつながり，その中でまた一人一人が成長するという好循環のスパイラルが生まれます。

小笠原の子よ　つねに　君らしくあれ　ひとりぼっちに　たじろがず

と伝えていきたいと思います。

校内をプラプラ歩いて回ると，楽しそうに授業をやっているクラスがたくさんあります。
担任ができなくなり，授業ができなくなり，「授業をやれる教師はいいよなぁ」と思います。
「どっかのクラスで，私に授業をさせてくれるっちゅう担任はいんかなぁ」と心が訴えてきます。
しかし，ただでさえ授業時間数の少ない今年，「お前に授業をさせる時間はねぇ」と言われそうです。
（お前に食わせるタンメンは…）